

瀬戸山 I - b 遺跡発掘調査報告書

1987

掛川市教育委員会

例 言

1. 本書は、昭和62年1月19日から同年3月31日まで実施した静岡県掛川市古岡字花ヶ脇1909—8外に所在する瀬戸山I—b遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査地点の地籍は、掛川市古岡字花ヶ脇1909—8である。
3. 発掘調査は、瀬戸山I遺跡地内で計画された茶園改植に先立つ緊急の発掘調査で、国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が実施した。
4. 発掘調査では、土地所有者の原田つよ氏ならびに原田享司氏、周辺土地所有者の鈴木英年氏には、埋蔵文化財に対し多大なご理解とご協力を頂いた。
5. 発掘調査は、掛川市教育委員会の松本一男が担当し、市内在住の戸塚和美君には多大な協力を得て行った。また袋井市在住の前山庄一氏には現地で実測作業のお手伝いをしていただいた。
6. 発掘調査ならびに整理調査では次の方々に参加を得た。
戸塚和美・鈴木きの・大場せつ・大場しま・火庭二代子・小沢ろく・久保田まさ・鈴木辰江・鈴木はつ子・松浦せい子・萩田みさ子・鈴木操・萩田ふさ・佐藤かやの・石川豊子
7. 本書の編集は松本が行い、遺物の実測・トレース・執筆ならびに遺構全体図のトレースについては戸塚が行い、他の作業の全てと執筆は松本が行った。
8. 発掘調査事業業務は、掛川市教育委員会教育長伊藤昌明・社会教育課長安達啓・文化係長岩井克允のもとに社会教育課が所管した。
9. 調査によって得た資料は全て掛川市教育委員会が保管している。

目 次

I. 発掘調査と遺跡の概要 (松本)	2
1 調査に至る経緯と調査の目的	2
2 調査の方法と経過	2
3 遺跡の位置と周辺環境	3
II 調査の内容 (松本)	7
1 遺 構	7
2 遺 物 (戸塚)	18
III ま と め (松本)	21



遺跡地名

- | | | | | |
|-----------|---------|-----------|----------|--------------|
| 1. 瀬戸山Ⅰ遺跡 | 7. 坂ノ台 | 13. 溝ノ口 | 19. 瀬戸山Ⅲ | 25. 境新 |
| 2. 八海山 | 8. 後森ヶ谷 | 14. 中ノ原 | 20. 花ノ渡 | 26. 東山 |
| 3. 又太郎 | 9. 中山 | 15. 高田上ノ段 | 21. 高田 | 27. 金駒原(久能山) |
| 4. 安三山 | 10. 城ノ原 | 16. 古岡下ノ段 | 22. 女高 | 29. 二反田 |
| 5. 長福寺 | 11. 東原 | 17. 青岡原 | 23. 平岡ヶ谷 | 30. 岡津原Ⅰ |
| 6. 古城 | 12. 今坂 | 18. 瀬戸山Ⅱ | 24. 石原次 | |

第1図 遺跡の位置と周辺の弥生後期～古墳前期遺跡

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的

掛川市の西城、袋井市との境を北から南へ向かって流れる川がある。原野谷川である。原野谷川は、掛川市北部の白山山赤メソレ山に端を発し、下流において垂木川・逆川などを合わせて袋井市域に入り、太田川と合流する。その長さ28380mを測り、掛川市内では最も長い川である⁽¹⁾。この原野谷川流域には、中小さまざまな広さの河岸段丘があり、段丘上に多くの遺跡をのせている。これから紹介する瀬戸山Ⅰーb遺跡（瀬戸山Ⅰ遺跡b地点）も、これら河岸段丘の内の一つ“吉岡原”（掛川市各和地区・高田地区・吉岡地区に広がる和田岡原の一つ）を舞台として繰り広げられた人間の足跡（遺跡）である。

現在、和田岡原一帯には茶園が広がっており、ここで生産されるお茶は茶所掛川をささえるほどまでになっている。いつの時代・何事にも改革はつきもので、この茶園栽培においても近年米品種改良が行われている。この品種改良では、耕作土の入れ替え（地表土と地山土との転換、いわゆる“天地返し”）が取り入れられており、大地に刻まれた人間の足跡（遺跡）に思わぬ被害をもたらす結果となった。

今回、調査の対象となった瀬戸山Ⅰ遺跡のこの地点でも茶樹改植の計画が上がり、遺跡の消滅が免れない状況となった。そこで掛川市教育委員会では、国と静岡県からの補助金を得て、遺跡の記録保存を目的として発掘調査を行うこととなった。

（参考文献）

(1) 森英雄他 『掛川市誌』 掛川市・掛川市誌編集委員会

2. 調査の方法と経過

今回実施した発掘調査地点は、吉岡原の南端部付近の標高およそ55mに位置し、西側に1本の大きな谷が南から入り込んでいる。

現地調査では、まず始めに調査区の設定を行い、次に昨年度確認した上層確認状況に従って機械による耕作土の掘削作業を行った。続いて人工による調査面の掘削・精査・遺構の確認を行い、並行して杭打ち作業を行った。

杭打ち作業は、調査地の北東角の地境杭付近（地境を保護する意味で）に基点（A、1）杭を打ち、道路に向けた南東角付近に見通しの点を設定することから始めた。この2点を結ぶ線を調査の基本とし、基点（A、1）杭から南へ5m毎に（B、1）、（C、2）、……、（F、1）という杭を打った。そしてこれらの杭から90°西向きに機械の頭を振り、それぞれ5m毎に杭を落とした。こうして5m四方の小区画を設定し、それぞれの小区画の名称は区画の北東隅に位置する杭

の名称をそのままあてることとした。つまり、(A, 1) グリッドの北東角には (A, 1) 杭が、(C, 3) グリッドの北東角には (C, 3) 杭が位置し、逆に (A, 1) 杭の南東に位置する区画を (A, 1) グリッド、(C, 3) 杭の南東に位置する区画を (C, 3) グリッドと呼ぶこととした。調査では、遺構の検出位置、遺物の出土位置を上述した小区画の名称に従い表記し、本報でもこの呼び方に従って報告した。ただし、遺構内出土遺物については、○遺構出土遺物として取り上げを行った。

現地での図面については、遺構全体図を上記設定の区画に合わせ20分の1縮尺で作成し、主たる小穴その他遺構については10分の1縮尺により実測図を作成した。

写真による記録は、プロローニーサイズ(6×7)原画白黒、35mmサイズ原画白黒・カラリバーサル撮影により行った。

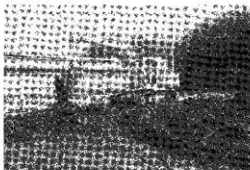
現地での作業は、以上の内容により検出した遺構・遺物の記録を行い、3月26日・27日両日の埋戻し作業を最後として終了した。

3. 遺跡の位置と周辺環境

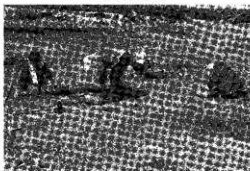
瀬戸山Ⅰ遺跡は、掛川市街地から北西に約10km程行った吉岡地区に所在する遺跡で、この吉岡地区の東側を北から南に流れる川“原野谷川”が形成した河岸段丘“吉岡原”の南城を占地する。現地へは、吉岡原を東西に横切る“県道掛川山梨線”を南に500m程入ると行き着くことができる。

瀬戸山Ⅰ遺跡が立地する吉岡原は、標高55m～60m前後を測る河岸段丘面であるが、ここから南へ向かうと標高30m～50m代の“高田原”と呼ばれる河岸段丘面が続く。この吉岡原ならびに高田原の西側には、南から北へと入り込む谷が幾本にも枝分かれをして、段丘面を切り込んでいる。そしてこれら小谷が今でも水の源として、人々に潤いを与え続けている。

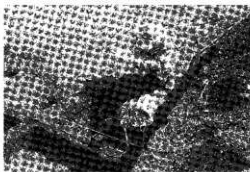
瀬戸山Ⅰ遺跡は、こうした地理的環境を背景として営まれた集落跡であるが、吉岡原・高田原



重機稼働風景



発掘作業風景



実測風景

には、この他にも同時代の遺跡が数多く存在する。次にこれらの遺跡を紹介し、遺跡の動きを探ってみたい。(第1図・第2図参照)

標高55m～60m代に立地する遺跡は、城ノ腰遺跡・東原遺跡・中原遺跡・高田上ノ段遺跡・溝ノ口遺跡・今坂遺跡・吉岡原遺跡・瀬戸山Ⅰ・Ⅱ遺跡である。この内段丘縁辺部に位置するのは城ノ腰遺跡・東原遺跡・高田上ノ段遺跡・吉岡原遺跡で、溝ノ口遺跡・今坂遺跡・瀬戸山Ⅰ・Ⅱ遺跡は小谷を囲む位置に占地している。

次に標高40m代に立地する遺跡は、瀬戸山Ⅲ遺跡・花ノ腰遺跡・高田遺跡・女高遺跡がある。段丘縁辺部に位置する遺跡は女高遺跡のみであるが、他はすべて小谷を囲んで位置する遺跡である。

次にこれらの遺跡群の動きについて触れてみたいが、その前に遺跡毎の継続時間を表面採取資料によりまとめてみる。⁽¹⁾

a. 縄文時代晩期末に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……瀬戸山Ⅱ遺跡

b. 縄文時代晩期末に成立し古墳時代中期以降まで継続する遺跡……吉岡下ノ段遺跡

c. 弥生時代中期に成立し弥生時代中期で終結する遺跡……なし

d. 弥生時代中期に成立し弥生時代後期まで継続する遺跡……なし

e. 弥生時代中期に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……女高遺跡

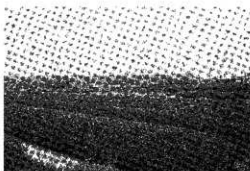
f. 弥生時代後期に成立し弥生時代後期で終結する遺跡……中原遺跡

g. 弥生時代後期に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……東原遺跡・溝ノ口遺跡・今坂遺跡・吉岡原遺跡・高田上ノ段遺跡・瀬戸山Ⅰ遺跡・瀬戸山Ⅲ遺跡・花ノ腰遺跡

h. 弥生時代後期に成立し古墳時代中期以降まで継続する遺跡……城ノ腰遺跡・高田遺跡

である。これらの状況は、あくまでも表採資料によるもので今後調査することにより多少の違いはでてくると考えられる。しかしここでは表採資料であるがということを前提条件として、これら遺跡群の動態を地形を加味して探ってみたい。

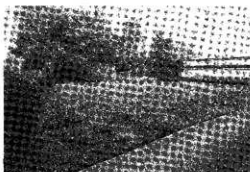
高田原と吉岡原における最も古い資料を出す瀬戸山Ⅰ遺跡と吉岡下ノ段遺跡が、段丘面上位面



遺跡遠景 (東から)



遺跡遠景 (北から)

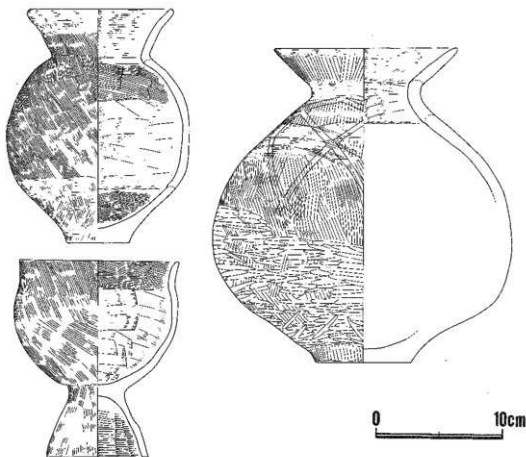


遺跡近景 (調査前)

と下位面（平面的に見れば西側城と東側城）のそれぞれにまず成立し、これらが母体となり、弥生時代後期に至ると吉岡下ノ段遺跡が高田上ノ段・中原・城ノ腰・東原の各遺跡を生み、瀬戸山Ⅱ遺跡がまず女高遺跡を生みさらに高田遺跡を生んだ。瀬戸山Ⅱ遺跡は一方で今坂・溝ノ口・吉岡原・瀬戸山Ⅰ・瀬戸山Ⅲ・花ノ腰などの遺跡を生んだ。弥生時代後期に遺跡の数が増える現象は当地域に限らず市内各所に親られる現象である。いずれにせよ、高原・吉岡原には遺跡が増えた。瀬戸山Ⅰ遺跡はこうした遺跡の動きの中で、弥生時代後期に成立し古墳時代前期まで継続した集落跡である。

《参考文献》

- (1) 佐藤由紀男「弥生時代の遺跡の概要」『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』掛川市教育委員会（1984）



第3図 瀬戸山Ⅰ-a遺跡出土土器実測図

II 調査の内容

今回の発掘調査では、掘立柱建物跡（SH）1棟と小穴（SP）158基、そして時期・意味不明遺構（SX）1基のみであった。調査区の北側半分については、最近まで家屋のあった所で、ゴミ捨て穴、ドブ穴などの現代物が混入する穴が確認された他、屋敷と畑との地割溝も確認されている（第4図遺構全体図中網目のかかったものがそれらである）。

出土遺物は、第10図に示したものが大半で全て土器破片であった。そしてこれら遺物は全て小穴などの遺構内からの出土である。

当該地点周辺で遺物包含層とされる黒色土あるいは暗褐色土などの自然堆積層は、当該地点南西隅でも確認しているが、調査では遺構外出土遺物はほとんどなかった。

当該地点での居住に伴う遺構が少ないこと、出土した遺物が非常に少ないこと、遺構外出土遺物がほとんどないことなどを考え合わせると、当該地点は瀬戸山I遺跡の西側のはずれに近い場所でないかと思われる。

ともあれ、この項では数少ない遺構の中から、掘立柱建物跡（SH101）と小穴のうち掘り方の確かなもの（SP41・51・52・81・83・92・95・97・100・106・107・128）そして時代・意味不明遺構（SX01）と、図化に堪え得る土器破片を中心に紹介する。

1. 遺構（第4図～第9図）

前述したように今回の調査で確認した遺構は、掘立柱建物跡（SH）1棟、小穴（SP）158基、時代・意味不明遺構（SX）1基のみである。

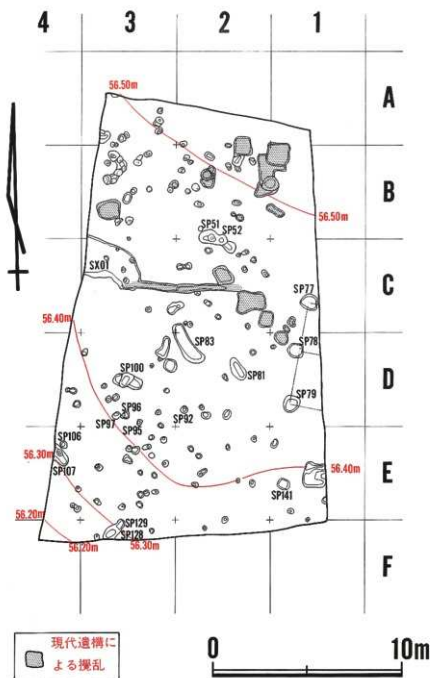
これらの構築時期は、第10図に示した土器破片から考えるにおおむね弥生時代後期（あるいは弥生時代後期から古墳時代前期前半頃）と考えられる。

またこれらの遺構は、掘立柱建物跡が調査区の東域に、図化した（第6図～第8図）小穴は調査区の中程から南城にかけて、そして時代・意味不明遺構が調査区の西域に検出したものである。

以下、挿図に従い説明を加えていく。

SH01 検出した位置はC-D-1グリッドで、柱穴列東側半分の柱穴列は調査区の外に位置する。開口幅は明らかでないが、奥行5、6mを測るものとする（1間・2間あるいは2間・3間の規模となるか？）。長軸方位は、ほぼN-11°-Eを測る。出土遺物は、第10図2～8の土器破片のみである。これらの遺物内容から弥生時代後期後半の構築物であると考えたい。

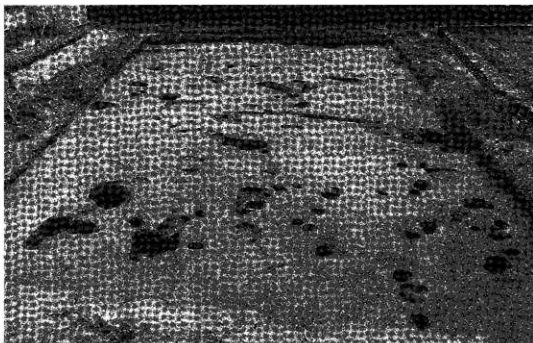
次にこの掘立柱建物跡を構成する柱穴個々について説明を加えておく。北から南へとSP77・SP78・SP79と並ぶ。SP77は、平面形が不整形の柱穴で、長径86cm・短径82cm・確認面からの深さ40cmを測る。覆土は、①黒色土（ローム粒含有。粘性・しまりのある土）、②暗褐色土（ロー



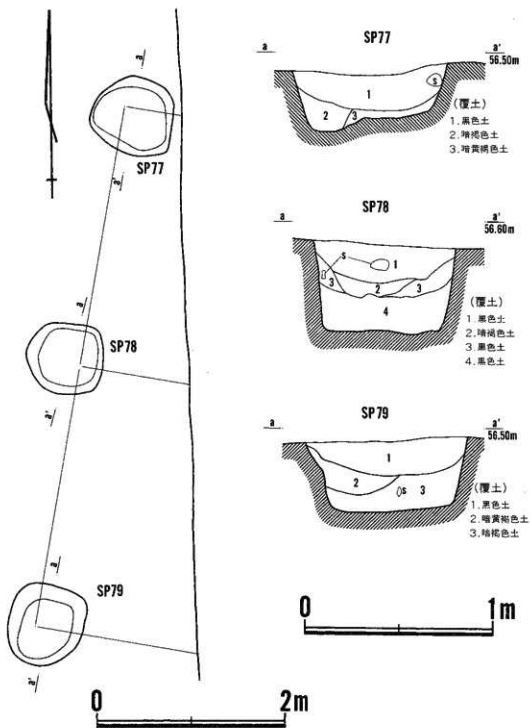
第4図 遺構全体図



調査区完掘状況（南から）



調査区完掘状況（北から）



第5圖 SHO1実測図



SH01 完掘状況（南から）



SH01 完掘状況（西から）

ム粒含有。粘性・しまりのある土)、③暗黄褐色土(小砂利を含有。粘性・しまりの強い土)で構成される。S P 78は、平面形五角形の柱穴で、長径82cm・短径75cm・確認面からの深さ56cmを測る。覆土は、①黒色土(ローム粒含有。粘性・しまりのある土)、②暗褐色土(ロームとの溶混が見られ明る味のある土。粘性・しまりのある土)、③黒色土(粘性・しまり共にある土)、④黒色土(ローム粒・小砂利を少々含む。粘性・しまりは強い)の4層により構成される。S P 79は、平面形不整形の柱穴で、長径88cm・短径80cm・確認面からの深さ50cmを測る。覆土は、①黒色土(ローム粒含有。粘性・しまりのある土)、②暗黄褐色土(ロームがブロック状に混入。粘性・しまりの強い土)、③暗褐色土(ロームとの溶混が見られる。粘性・しまりの強い土)の3層により構成される。各々の柱穴土層断面図では柱痕がうまく表現されていないが、調査所見ではS P 77とS P 79はやや西寄りに、S P 78ではやや内側の東寄りに柱痕らしき落ち込みを確認している。土層断面図では各々の②層がその一部である。

S P 51・52 B～C-2グリッドに検出した小穴である。平面形・断面形ともに不整形である。S P 51は中央よりやや東寄りが一段低く窪んでおり、S P 52は中央付近が最も深くなる。S P 51は長径110cm・短径73cm・確認面からの深さ22cm最深で40cmを測る。S P 52は長径(推定)66cm・短径52cm・確認面からの深さ25cmを測る。

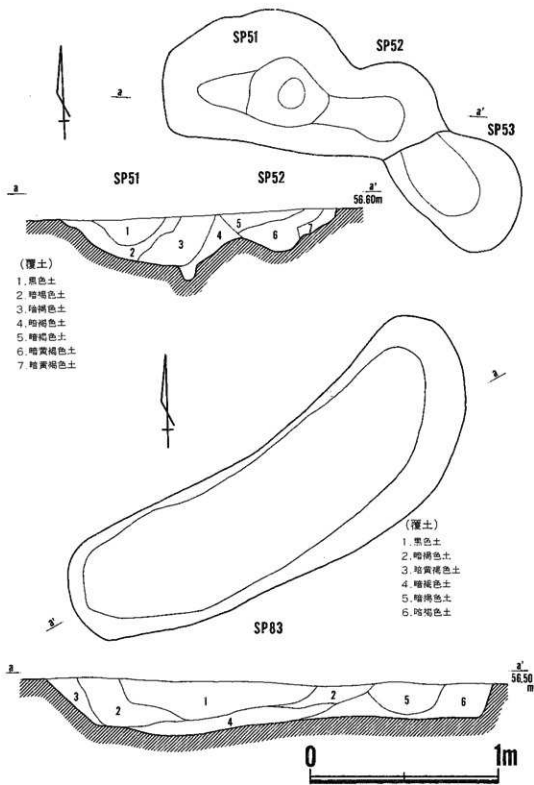
小穴の覆土は、S P 51が①黒色土(ローム粒散在。粘性あるがしまりない土)、②暗褐色土(ロームがブロック状に混入。粘性は強いがしまりない土)、③暗褐色土(ローム粒が少量含まれる。粘性・しまりのある土)、④暗褐色土(ローム粒が多量に混入。粘性・しまりの強い土)で構成される。S P 52が⑤暗褐色土(粘性はあるが、しまりない土)、⑥暗黄褐色土(ロームとの溶混が見られ黄色味のある土。粘性・しまりの強い土)、⑦暗黄褐色土(ロームとの溶混が激しい。粘性・しまりともに強い土)で構成する。S P 51とS P 52は一見同じ遺構であるが、上層観察状況では、別遺構であり、S P 52の方が新しい遺構であることが確認できた。

S P 81 D-2グリッド東寄りの位置に検出した遺構で、小穴というよりも土坑として扱うべき状況を示している。大きさは、長径127cm・短径65cm・確認面からの深さ31cmである。出土遺物はない。

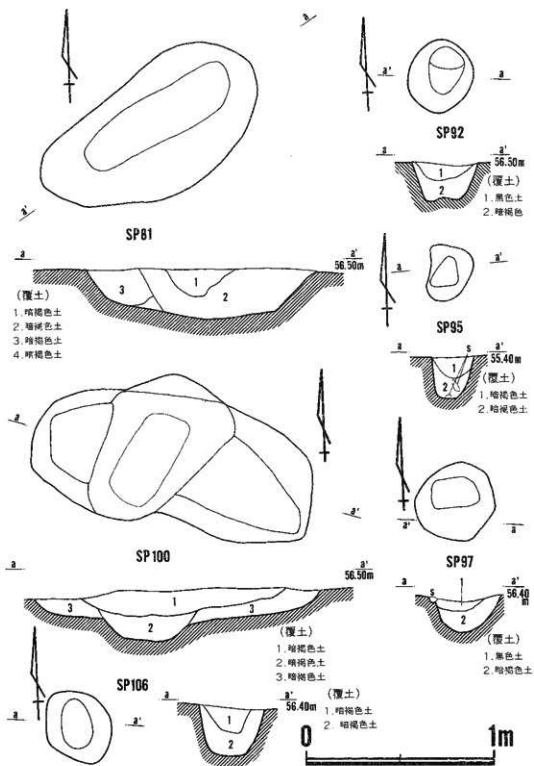
覆土は、①暗褐色土(ローム粒含有。粘性はあるがしまりない土)、②暗褐色土(ローム粒と小砂利を含有。粘性はあるがしまりない土)、③暗褐色土(小砂利を含有。粘性はあるがしまりない土)、④暗褐色土(ロームとの溶混が見られやや黄色味のある土)で構成される。

S P 83 今回の調査の中で最も大きな小穴で、S P 81同様土坑として扱うべきかも知れない。検出した位置は、調査区の中央C～D-2～3グリッドの範囲である。大きさは、長径245cm・短径78cm・確認面からの深さ25～35cmである。出土遺物はない。

覆土は、①黒色土(小砂利を含有。粘性はあるがしまりない土)、②暗褐色土(ロームとの溶混が見られ黄色味のある土。粘性はあるがしまりはない)、③暗黄褐色土(ロームとの溶混激しく黄色味のある土。粘性・しまりの強い土)、④暗褐色土(ローム粒・小砂利を含有する。粘性が強くしまりのある土)、⑤暗褐色土(小砂利を含有。粘性が強くしまりのある土)、⑥暗褐色土(ロ-

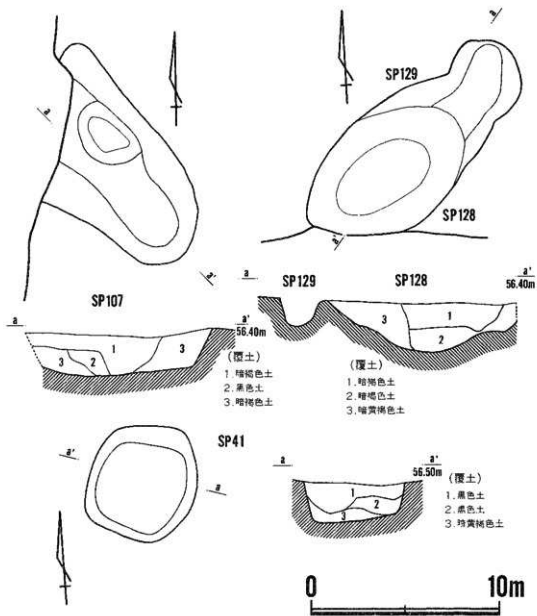


第6图 SP实测图(1)



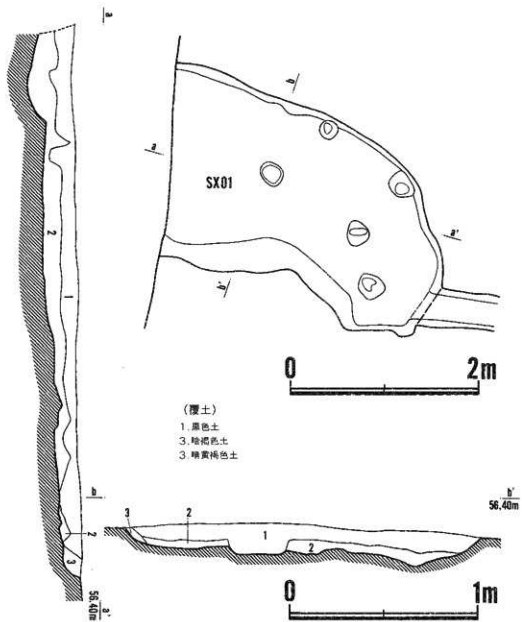
第7圖 SP実測圖(2)

ムとの溶混が見られる。小砂利を含み、粘性はあるがしまりのゆるい土)で構成される。平面形では一つの遺構であるが、断面形から見て複数の遺構が寄せ集まったとも考えられる。



第8図 SP実測図(3)

SP92 S P83の南、D-2グリッドの南西隅に検出した小穴である。平面形はほぼ円形で、長さ36cm・幅34cm・確認面からの深さ34cmである。この小穴からの出土遺物はない。覆土は、①黒色土（粘性が強くしまりのある土）、②暗褐色土（ロームとの溶混が見られる。粘性が強くたくしまりのある土）で構成される。

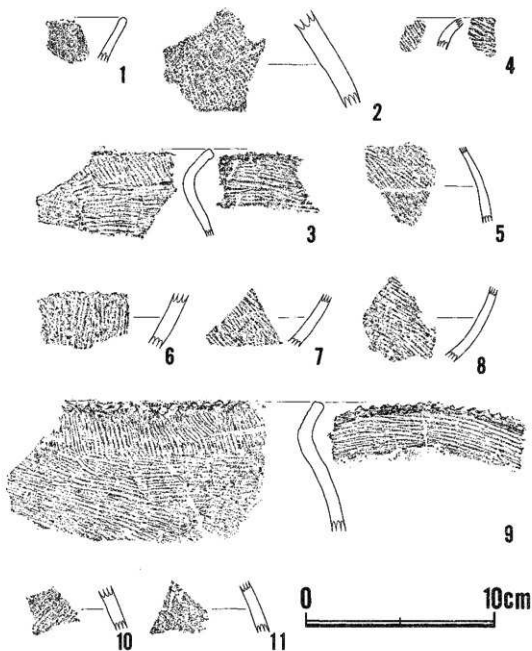


第9図 SX01実測図

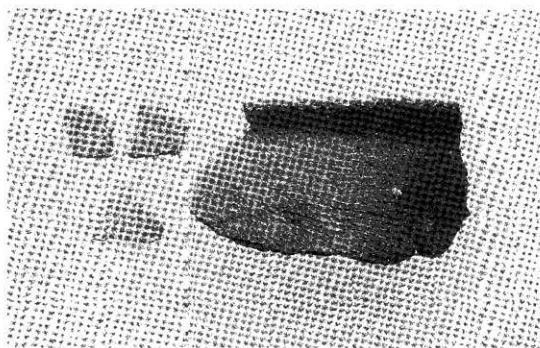
- SP95** SP92の西側、D-3グリッドに検出した小穴である。平面形は不整形形であるが、断面形で柱穴状を呈する。長さ29cm・幅22cm・確認面での深さ23cmを測る。覆土は、①暗褐色土（ローム粒が散見される土で、しまりはない）、②暗褐色土（ロームとの溶混が見られ、粘性はあるがしまりのゆるい土）で構成される。出土遺物はない。
- SP97** SP95の西側、D-3グリッドに検出。平面形はほぼ円形で、長さ42cm・幅41cm・確認面からの深さ30cmを測る。覆土は、①黒色土（粘性はあるがしまりはない）、②暗褐色土（小砂利を含み、粘性・しまりのある土）で構成される。出土遺物はない。
- SP100** SP95・97と同じD-3グリッドに検出。平面形は不整形形で、遺構の中央部が一段深くなる。長さ150cm・幅70cm・確認面からの深さ15cm・最深部で27cmを測る。覆土は、①暗褐色土（ローム粒・小砂利を含有。粘性・しまりのある土）、②暗褐色土（①よりもロームと混ざる。小砂利を含み、粘性・しまりのある土）、③暗褐色土（一層ロームとの溶混は増す。粘性・しまりのある土）で構成される。出土遺物はない。
- SP106** 調査西壁際のE-4グリッドに位置する。平面形は不整形形で、大きさは長さ・幅ともに35cm・確認面からの深さ35cmである。覆土は、①暗褐色土（ローム粒含有。粘性はあるがしまりのない土）、②暗褐色土（ローム粒含有。①よりも黒味のある土で、粘性があるもののしまりのない土）で構成される。出土遺物はない。
- SP107** SP106のすぐ南隣りに検出した遺構で、遺構の底には一段低く小穴状の落ち込みを確認。調査区の西側に遺構が出ているので規模は定かでない。覆土は、①暗褐色土（炭化粒・ローム粒を含む。粘性は強いが、しまりのない土）、②黒色土（炭化粒含有。粘性はあるがしまりのない土）、③暗褐色土（ロームとの溶混が見られる。粘性はあるが、しまりのゆるい土）で構成される。出土遺物はない。
- SP128** 調査区の南壁際F-3グリッドに検出した。南側の一部を調査区外に求められる。この為、平面形・規模は定かでない。覆土は、①暗褐色土（ローム粒含有、粘性はあるがしまりのゆるい土）、②暗褐色土（ロームと溶混、小砂利を含む。粘性は強いがしまりはない）、③暗黄褐色土（ロームとの溶混激しく黄色味のある土。粘性強くしまりのある土）で構成される。出土遺物はない。
- SP141** 調査区の南東隅、E-1グリッドに検出。平面形はほぼ方形、大きさを長さ60cm・幅56cm・確認面からの深さ27cmと測る。覆土は、①黒色土（ローム粒混在、粘性はあるがしまりのない土）、②黒色土（ローム粒混在、粘性・しまりの強い土）、③暗黄褐色土（ロームとの溶混激しく黄色味をもつ。粘性・しまりの強い土）で構成される。出土遺物はない。
- SX01** 調査区の西壁際B-C-3グリッドに検出。検出状況から西側に延びることは必ずで、規模・形状は不明である。ただ底面はほぼ平坦で、深さ20cm前後を測る。覆土は、①黒色土（炭化粒・ローム粒を含有。粘性・しまりのある土）、②暗褐色土（炭化粒・ローム粒多量に含有。粘性はあるがしまりのゆるい土）、③暗黄褐色土（ロームとの溶混が見られる。粘性は強いがしまりのゆるい土）で構成される。出土遺物はない。

2. 遺物 (第10図)

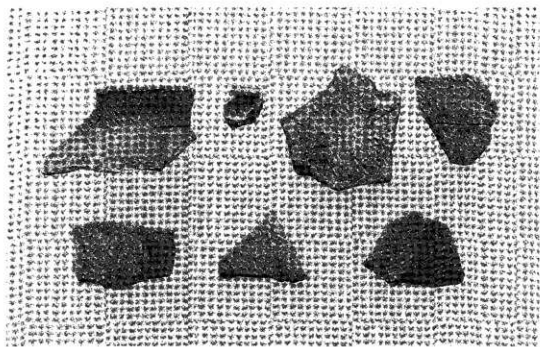
今回の調査で出土した遺物はすべて土器の類である。出土土器のほとんどが小破片で、総数も



第10図 出土遺物拓影図



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

20点にも満たない。このうち実測可能なものすべてを図示し、第10図に掲げた。以下番号順に説明していく。

1はSP50からの出土土器である。壺形土器の口縁部小破片で、内面、口唇部外面にはナデが施され、外面下部には縦位のヘラ磨きが認められる。

2～8はSP77からの出土土器である。2は壺形土器の胴部破片で、外面には縦位のハケ目、内面にはナデが施されている。

3～8はいずれも台付甕形土器であるが、3と4、7と8は色割・胎土・焼成・調整等から判断してそれぞれ同一個体の破片と考えられる。3は口縁部破片で、外面には口縁部から頸部にかけて縦位のハケ目、下部には横位のハケ目が施されている。口唇部には坦面を設け、櫛状工具による刻みが施されている。内面には上部に横位のハケ目、下部にはナデが施されている。

4も口縁部破片であるが、口唇部は遺存しない。3と同様の調整が認められ、外面にはスス痕も確認できる。

5は胴上半部破片で、外面に斜位のハケ目、内面にはナデが施されている。

6は胴下半部破片で、外面に縦位のハケ目、内面に板ナデが施されている。

7、8は胴下半部破片で、外面には斜位のハケ目、内面には板ナデが施されており、一部スス痕も認められる。

9はSP117からの出土土器で、台付甕形土器の口縁部破片である。口唇部に坦面を設け、坦面には横位のハケ目、口唇部外面には櫛状工具による刻みが施されている。外面には口縁部から頸部にかけて縦位のハケ目が、胴部には斜位のハケ目が施されている。内面には口縁部に横位のハケ目、胴部には板ナデが施されている。また外面全体にスス痕が認められる。

10はSP121からの出土土器で、壺形土器胴部破片である。外面には縦位のハケ目が施されており、内面にはナデが認められるが、胎土には砂粒を多く含んでおり、焼成はあまく、遺存状態は悪い。

11は遺構外出土土器で、E-3 Grid遺構確認より検出された。壺形土器胴部破片で、内面にはナデが認められる程度で、全体的に遺存状態は悪く、調整痕は明確でない。

以上が今回の調査で出土した図示可能なものすべてである。遺物の絶対数が極めて少ないこと、いずれも小破片であることなどから多くを言及することは困難であるが、彌生時期について触れておきたい。3、9の台付甕形土器の特徴、口唇部に坦面を設け、櫛状工具による刻みを施していること、口縁部外面はナデではなく、ハケ目が施されていることなどから弥生時代後期（菊川式）に属するものと考えてよからう。他のものについては小破片であることから積極性に欠けるが、同遺跡の他地点（瀬戸山I-a遺跡）出土の遺物を参考して考えると、瀬戸山I-a遺跡出土の土器は弥生時代後期から古墳時代前期のものであり、当遺跡の遺物も同時期のものと考えてよからう。よって3、9以外の土器については、弥生時代後期から古墳時代前期に属するものとして、ある程度の時間幅を持ってとらえたい。

Ⅲ ま と め

以上述べてきたとおり、今回の発掘調査では掘立柱建物跡（SH）1棟と小穴（SP）158基そして時代・意味不明遺構（SX）1基を確認し、それらに伴ない少数であるが弥生時代後期～古墳時代前期に属すと思われる上器破片を出土した。ここでは、本報告のまとめとして（1）調査地点が瀬戸山I遺跡内のどんな位置にあたるのか？、（2）今回出土した遺物から瀬戸山I遺跡がいつ頃営まれた遺跡であるのか？、この2点について遺構の配置状況・出土遺物の特徴・調査所見から考察してみたい。

（1） 今回の調査地点が瀬戸山I遺跡のどんな位置にあたるのか？

結論から述べれば、遺跡内の西域付近であると考えたい。調査区の東域に検出した掘立柱建物跡の機能を特に考えないで遺構の配置状況を観ると、数多くの小穴（柱穴状を示す小穴は少なくそのほとんどが単に小穴であるもの）が分布する中において、掘立柱建物跡1棟は調査区の東壁際に検出した。これは当該地点の東側で数多くの竪穴式住居跡ならびに掘立柱建物跡を検出したA地点⁽¹⁾との面積当りの遺構検出量と比較して非常に低い密度であることから、遺跡の端の状況を示すものと考えられる。さらに遺物の出土状況を観ても、今回の調査で出土した遺物の量は極くわずかで、その多くが小穴からの出土であった。これらの状況は全て遺跡の端での状況を示すものであると考えられるのである。それでは遺跡の中心はどこか？やはり当該調査地点の東側で確認したA地点⁽¹⁾付近が瀬戸山I遺跡の中心であると考えたい。

（2） 今回出土した遺物から瀬戸山I遺跡がいつ頃営まれた遺跡であるのか？

この点については、遺物の項でも述べた通り、口唇部に坦面を設け櫛状工具による刻みが明瞭にみられる台付甕形土器が含まれること、埴形土器の口縁部破片が含まれること等から、瀬戸山I遺跡が弥生時代後期から古墳時代前期に営まれた遺跡であることが想定されることとなった。これはA地点⁽¹⁾で把握した結果と合致することであり、遺物の内容からも当該地点は瀬戸山I遺跡に抱括される。

以上である。

《参考文献》

- (1) 松本一男他『瀬戸山I-a遺跡発掘調査概報』
掛川市教育委員会（1987）

瀬戸山I-b遺跡発掘調査報告書

昭和62年3月30日

編集 掛川市教育委員会
発行
印刷 静岡市中村町166-1
株式会社 三 創
TEL 0542-82-4031

